

【イギリス文学と歴史2 ブックレポート】

Jane Austen's *Pride and Prejudice*

08L042 佐藤友紀美

女性の地位が確立されていなかった頃の19世紀初頭に登場したジェイン・オースティン (Jane Austen 1775-1817)。その時代の社会をそのまま作品に映し出していると言われている。ここではオースティンの代表的な作品、『高慢と偏見』 (*Pride and Prejudice* 1813) を取り上げる。主人公は、イギリス南西部の田園ロングボーンに住む中流階級の地主、ベネット家の次女・エリザベス。ベネット家には5人の娘がいるが、現在ではピンとこないが、当時は身内の年長の男子のみが家屋敷を相続することができた。そしてこのベネット家には男子相続人がいないため、彼らが生まれ育った家もその土地も「限嗣相続」で、父親の死後は親戚の男性に譲られることになっていた。娘たちは十分な財産が残らないばかりではなく、このままで慣れ親しんだ家から追い出される羽目に遭う。よってベネット夫人は娘たちを何としても良いところに嫁がなければならないというプレッシャーを感じていた。娘たちは舞踏会やお食事などの「出会い」のきっかけになるものによく参加していた。そしてこの度、引っ越ししてきた独身でお金持ちのビングリー氏を誘い、舞踏会が開催されることになる。優しく美しいベネット家の長女、ジェーンとビングリー氏は仲良くなる。その一方で、ビングリー氏の友達のダーシー氏はこの二人の中を不満に思っていた。独身で、お金持ちのビングリー氏より、さらに収入が上回る彼はお高くとまり、無愛想で、舞踏会に来た人みんなから嫌がられた。姉の恋を邪魔するダーシー氏をエリザベスは誰よりも嫌い、彼に対して率直で反抗的な言動を繰り返す。しかし、やがてダーシー氏は生き生きとしたエリザベスに引かれ、彼女に求婚する。一旦は断ったものの、プライドという仮面の奥にあるダーシー氏の誠実さに気づき、彼のことを気になりだすエリザベス…。様々な困難と疑惑を乗り越え、エリザベスは本当の彼を知っていくにつれて心惹かれていく。

この作品の背景となっている18世紀末～19世紀初頭のイギリスでは、女性の地位が認められていなかったため、基本的に女より男の時代だった。作品の中に出でくる「限嗣相続」は、男性の女性に対する支配を可能にする権力の総体である「家父長制」に基づく遺産相続の制度である。これによって、もし一家の主が死んでしまったら、女ばかりが残された場合、自分たちの土地・財産を親戚の男性に奪われてしまう恐れがある。そのために当時の女性たちの多くは「良い夫」探し (玉の輿婚?) に奔走していたに違いない。しかし、基本的に「紳士」の娘たちは「紳士」たちと結婚するが、同じ「紳士」階級であっても、そこには更なる身分格差や収入格差があり、結婚にも大きく影響している。今の時代では、男性よりも、女性の財産が高い場合の方が問題とされているようだが、当時は、「結婚」はお互いの家族の財産を増やす重要なチャンスだったため、女性の持参金の多い少ないはその女性の結婚相手選びに大きな影響を及ぼした。エリザベスとダーシーの場合は、勿論ダーシーの収入が高いものの、持参金の少なさ、そして家柄の差が開き過ぎていることが問題となっている。ダーシーにとっては「魅力」として映るエリザベスの振舞いも、古い家柄のダーシー家の親戚からは、「田舎もの」、「身分が低い」、「振る舞いが野蛮で礼儀がなっていない」と見下されることになるのだった。やはり釣り合おうお家柄というものがいつの時代にも考慮されるようだ。

今回、私はブックレポートにオースティンの『高慢と偏見』を選んだ理由は、普段から有名な作品を学

生のうちに読んでもおきたいと思っていたからである。私は活字を読むのが苦手だが、このように授業の課題として出されるのは自分を鍛える絶好のチャンスだと思い、周りの人よりも厚い本に挑戦することにした。読むのが遅いため、やはり最初はひどく苦戦し、特にこの小説の最初の部分では、主人公よりも周りの人の描写ばかりでつまらなく感じた。しかし読み進めていくうちに、だんだんおもしろくなってきて、半分以降はあつという間に読み終えることができた。

まず読んでいて気がついたのは、エリザベスの性格や態度が、私とかなり似ている点である。エリザベスに美人の姉がいるように、私にはあまり似ていない堀北真希似の妹がいる。身内にこういう人がいて、褒められたりはするものの、正直厄介なことの方が多いものである。またエリザベスの、人間観察が大好きで、人の気持ちを読むのが得意だと自負するところは、読んでいて自分のことのように痛々しく感じさせた。そして、いざ自分のこととなるとその特技があまり働くなくなるところも、自分のことを言われているようで落ち込んだ。意地っ張りで強情で、いわば「ツンデレ」というか「ツン」ばかりのところも自分そのものである。ちょっと常識を外れていても面白ければそれでよしとしてしまうところもとても似ていると思う。主人公が自分とよく似ていることから、自分に重ね合わせることができ、読みながらいつのまにかエリザベスの幸せを応援していた。

また私は「限嗣相続」という古臭い制度には憤りを感じた。しかし世界は今でもそのような傾向があるのは間違いない。日本の皇室でも、そしていまだに一部の一般家庭でも、「男」の誕生が歓迎されている。私が生まれた時に、父が祖母に電話で「元気な女の子が生まれたよ」と言ったら「ブチッ」と電話を切られたそうである。その後も娘しか生まれなかつたため、祖父母は後継ぎのことを気にしていた。祖母は私の父ともう一人兄を生んでいて「男」を生むのが当たり前だと思っていたようであり、そのような態度をとっていたことを、私の母は今でも根に持っている。『高慢と偏見』を読んでいて「現代ではないなあ」と思うことよりも、今でも通じるもののはうがたくさんあることに大変驚いた。現代はずいぶん改善されたと思い込んでいたが、今でも社会は「偏見」に溢っていて、人間は大して成長していないことに気づく。

また収入があって、ハンサムで、ジェントルマンで、話し上手の、最高にいい男を追っかけまわす女たちが現れるのは、松嶋菜々子主演の『やまとなでしこ』(フジテレビ)のような光景である。このドラマでは「この世で一番嫌いなものは貧乏。女を幸せにしてくれるのはお金だけ」というのが主人公の口癖だった。『高慢と偏見』のエリザベスはここまでお金に執着心はないが、エリザベスの周りの女性たちは似たようなものであった。最終的に『やまとなでしこ』のほうでは、玉の輿よりも本当に好きになった人の所に行きつく。エリザベスは自分の身分のことは気にしていたが、ダーシーに対しては玉の輿願望や彼の高い身分と収入だけで結婚を決めたようには思えない。そこには彼に対する尊敬と愛情もあったから結婚したのだと思う。この小説を読む限りでは、当時のイギリスでは、わりと恋愛結婚が許容されている印象を受けた。おそらく同じ時代の日本では、同じことは起こっていなかつただろう。

『高慢と偏見』は現代チックなお話で、とても面白い作品であった。お嬢さんたちのいい男探しは、現代の「婚活」がさらに貪欲になったもののように感じられる。しかし一生懸命に「運命の相手」と出会おうとしているところは、今も昔も変わらない。「私もいい加減がんばらないといけないなあ」と思えたので、良い薬になったような気がするのであった。

テキスト

オースティン、ジェイン 伊吹知勢訳 『ジェイン・オースティン著作集2』 文泉堂、1996年。

(レポート担当教員 杉村使乃)